
太陽のない国

かやしまみづき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽のない国

【Nコード】

N8959H

【作者名】

かやしまみづき

【あらすじ】

旅の途中で迷い込んだ不気味なゴーストタウン、殺人鬼と化した血まみれの少女、奇妙な薬屋。この場所で過去に起こった悲劇とは

……

第1話 無人

「キリル、道間違えたんじゃない？」

猫とコウモリを混ぜた様な小型の動物が言いました。

「間違つてないもん。ただの通過国！」

黒髪の少女が言いました。

「暗くなる前に着くつて言つたじゃん！」

「それはラズの聞き間違い！」

空は既に薄暗くなり、街灯が灯りはじめています。

その国には太陽がありませんでした。

年間日照時間が極めて短い為一日中薄暗く、地下を思わせる様な湿った空気が充満しているのです。

町並みはそこそ綺麗ですが、辺りに人は見当たらず不気味な程静まりかえっていました。

「誰も居ない、のかな」

あまりにしんとしていて、キリルは思わず小声で喋っていました。

「ごーすとたうんつてやつだね」

つられてラズも声をひそめます。

都市部に出るとカラフルなショーウィンドウがひしめきあっていました。楽しいその背景は無人の国を奇妙に彩っていました。

なかなかシュールな状況だとキリルは思いました。

「誰か居ませんかー？」

だいぶ不機嫌になった様子で、キリルは本日三つ目のホテルの扉を叩きます。ここも従業員らしき人は見当たらず、入口には鍵がかかっていました。

「誰も居ないなら鍵くらい開けておきなさいよ！」

むくれて軽く扉を二三度蹴りました。

「誰も居ないから鍵閉めてあるんだと思うよ」

結局その日は野宿をする事になり、ラズは不満そうな様子でした。

「冬の野宿は応えるね、キリル」

「町中だから野宿とは言わないもん」

「ヘリクツ。まさか町中で焚火する日がこようとは」

「はいはいスープできましたよ」

話題を思いつきりそらすと、キリル達は携帯食料とスープの簡素な食事を始めました。

夜になり辺りが更に暗くなると、国内は余計不気味さを増してゆきました。時折生暖かい風が吹き抜けていきます。

「こう暗いと何も出来ないね。もう今日は寝て明日早めに出ようか」

「そうだね」

ラズがキリルの肩の上で寝ようとしていた時。

「ぎゃあああああ!!」

突然遠くから男の悲鳴が聞こえました。

「……人居んだ」

ややあつて、驚きと感動のまざった声でキリルが呟きました。

「もつと別の所に驚くべきかと」

「個人の自由」

「まあそうだけ……」

言いかけてラズは驚愕の表情を浮かべました。

「え——」

第2話 遭遇

視線の先はキリルの後ろ。とっさに振り返るとそこには血まみれの少女が立っていました。

年齢は6歳ぐらいでしょうか。白い肌に金の巻き毛の持ち主は、「たましい、ちょうだい」

かすれた声で言うときリルに掴みかかりました。

「嫌です無理です絶対拒否!!!」

少女の顔が歪みました。

それと同時に、キリルの腕に少女の爪が突き刺さります。

「——!!!」

子どもではありえない握力でした。まるで万力で締め付けられているような。

腕から滴るのは、誰の血液？

キリルは何とか指先から球状の風圧を出し、それは少女の小さい体を2メートル程後ろに吹き飛ばしました。

自由になった腕は赤くなり痺れていました。

敷石の上で少女は一瞬きょとんとしてから、にやりと笑って。

「まほうつかい、なんだね」

愉しくてしょうがないといった表情をして立ち上がり、くるりと背を向けて暗闇に消えてゆきました。

それきり辺りはまた元の静寂に包まれて。

「なに今の……」

キリルはぺたんと地面に座り込みました。

「住民さんじゃない？ 物理攻撃効いたから幽霊ではないと思うけど」

「異文化交流は大切よね。でも自分の生命を守るってのはもっと大切だと思うの」

「うん、それで？」

「そこはかたなくやばい感じがしたんで、すぐに国を出ましょう」
「賛成」

そうしてキリル達は夜も明けないうちに国を出ることにしました。
月も出ていない寒い夜で、等間隔で立っている街頭の寒々しい光
だけが頼りでした。

第3話 薬屋

「あれ、珍しい。旅人さんですか？」

その初老の男は、閉店後の店を片付けていたらしく、店先にキリル達を見付けるとすぐさま寄ってきました。

「ええ、今から出国する所です」

「そうですね。何もない国だったでしょう。もう遅いですし、良ければうちで休んで行きませんか？」

キリルとラズは一瞬視線を合わせ考えてから了解しました。

彼は薬屋を営んでいるのでしよう。古びた店内にはありとあらゆる瓶や薬草が並べられています。

店の奥にはアンティークのテーブルセットが置かれていて、キリル達はそこに通されました。

「数年前まではこの国も栄えていたんですけどね。たった1人の少女が国を変えたんですよ」

「さっきの血まみれの子かな」

ラズが言いました。

「会いましたか。よく無事でしたね」

「まあ、なんとか」

キリルが答えました。

「あれは『魔女』って呼ばれてましてね。見る人全てを殺していくんですよ」

「あなたはこんな所に居て大丈夫なんですか？」

この質問は地雷かな、と思いながらも、ついキリルは聞いてしまいました。

「ああ大丈夫だ。あの子は私を殺せない」

そう言うとは彼はかさついた手で遮光瓶を1つ取り出しました。

「あの子を元に戻す薬を研究しているんだ。それから、彼女の両親を殺した奴を探す約束もしている」

「そうなんですか……」

「でも、殺される方にも問題はあある。旅人さんはそう思わないかい？」

答えられないでいるキリルに構わず、彼は続けます。

「彼女の両親はそれは悪どい高利貸しでね。だから私は2人を殺したんだ」

第4話 殺意

ごく当たり前な事を言うかの様に、彼は言いました。

「なんで、私達にそんな話話すんですか」

頭に血がのぼるのを感じながら、押し殺した声でキリルは言いました。

「だってすぐに君も殺されてしまうだろう？」

その時キリルの中で何かが切れました。

男に掴みかかるうとした瞬間。

狂った様に笑う彼の顔は、しかし一瞬にして消え去りました。

椅子から引きずり落とされた男を見下しながら、いつの間にか現れた金髪の少女は、静かな声で言いました。

「ずっと……騙してたんですね」

「あなたは私が人を殺してきても何も言いませんでしたね」

「本当は面白がっていたんでしょう？」

「私さつきすごい能力を手に入れたんです」

「魔法を使える様になったんですよ」

「あなたのおかげです」

虚ろな目で微笑みました。

「待つ……」

弁解しようとする男を無視して、少女は男の左胸に炎の球を撃ち込みます。

体の焼ける嫌な臭いがして、男はそれきり。

復讐はあっけない程簡単に終わり、気まずい静寂が辺りを包み込みました。

キリルはそれをただ見ているだけしか出来ませんでした。

「ばかみたいって思います？」

視線は床に落としたままで、少女はぽつりと呟きました。

「そんな……っ」

否定しようとしたキリルを遮る様に、少女は顔を上げてキリルを見ました。

「初めてだった。誰かを本気で殺したいって思ったの」

少女の目は深い深い蒼でした。

「昔の話、聞かせてくれないかな」

「……いいですよ」

持ち主の居なくなった椅子に気だるげに座ると、少女は話し始めました。

第5話 有罪

ある少女の物語です。

目が覚めると少女の横で両親が倒れていました。

慌てて駆け寄ろうとすると、右手に違和感を感じました。その手には血のついたナイフが握られていたのです。

その間の記憶がないにも関わらず、少女は裁判にかけられ、有罪となりました。

少女に抗うすべは無く、製薬実験室に送られました。

そこで少女は理想の容姿になれるという薬を飲まされました。

羨ましいじゃないかと思うでしょう？

でもその薬は酷い副作用が懸念されているものでした。

視覚で感じた全ての人間の容姿と、一部の身体機能をコピーできる。しかもコピーは意図しなくとも行われ、大脳に記憶されます。

好きな時にその姿になれる代わりに、コピーした、つまり人に会った分だけ早く寿命が減るという副作用が現れました。

それを回避するには、人の魂を体内に取り込むしかないんです。

急激に自分の体が衰弱してゆく事に恐怖を覚えた少女は、ある夜脱走し、初めて身寄りのない老人をピストルで撃ちました。

弾丸は頭蓋骨をぶち抜いて、皮膚の破片が嫌な音をたてて飛び散りました。

生暖かい血液が少女の肌を汚し、その光景は網膜に永遠に焼き付きました。

そして少女は研究員の1人であった男性に騙され、『魔女』と呼

ばれる存在になりましたとさ。

「——そう、だったんだ」

少女の話す壮絶な過去に、キリルは悲痛な表情を浮かべました。

第6話 魔女

「国民の半分は私が殺したんです。残り半分は、誰が『魔女』なのか分からないから、対人恐怖症になって、外出出来なくなっちゃった。それでみんなクル病とかでばたばた倒れてっつて。この国、日照時間が少ないから」

こんなに小さい体で、どれだけの傷を背負っていたんだろう。ぼんやりとキリルは考えていました。

「ねえ、私がこんな体になってなかったら、この人を憎いと思っても殺したりなんかしなかったと思う？」

泣き笑いの表情で少女は言いました。

副作用は少女の思考までも蝕んでゆき、やがて本物の『魔女』になりうるでしょう。

確実に軌道は破壊へと続いていました。

「この薬ね、切れると体が耐えられなくて死んじゃうらしいんです」

「あの人は私に薬を与え続けました。私を死なせない様にそうしてくれてるんだって、ずっと思っていました。本当はそんな事どうでも良くて、薬の効果を持続させたかっただけなんです」

「——っ」

キリルが何か声をかけようとした瞬間。

パンツと乾いた音と共に、彼女の体は弾けて粉々になりました。

「う……そ……」

それはあまりにも突然すぎて。

少女の欠片は宙を漂い、余韻すら残さないままに消えてしまいました。

「なん……で……やだ……何もしてないじゃない！ 何であの子まで消えなきゃいけないのよ!？」

「キリル落ち着いて！」

ラズがキリルをいさめます。

「だってあたし、あの子の名前だってまだ知らなかったんだよ……？」

それからキリルは、枯れるまでただずっと泣いていました。

夜が明けても、空は相変わらず薄暗いままでした。

最終話 名前

「これでまた家族一緒になれたのかな」

酷く憂鬱な声でキリルは呟きました。

町外れの墓地。冷たい風が黒いワンピースの裾をはためかせていきます。

誰に言っているという風でも無かったので、ラズは黙っていました。

少女の亡骸は全て消えてしまったので、一番陽当たりの良さそうな場所に丸い石を

置いて命日だけを記しました。

「名前、結局分からなかったね」

少女の名前は国民全員に知られていたので、調べようと思えばいくらでも調べられたでしょう。

でもキリル達はそれをしませんでした。

名前はちゃんと少女の口から聞きたかったのです。

そして、ちゃんと自分の口でその名前を呼んであげたかった。

『魔女』としか呼んでもらえなかった、少女の本当の名前。

キリルは一度手を握り、また開きます。するとそこには花が乗っていました。

彼女の髪の毛と同じ、金色の花。

こんな時だけは、自分が魔法を使える事が少しだけ救いでした。せめてもの餞に、^{はなむけ}哀惜の色を。

「行こ」

花を備え終わるのを見届けると、ラズが促しました。

「うん……」

キリルは名残惜しそうに立ち上がります。

「今度は道間違えないでよ？」

「なっ、だから間違えたんじゃないってば！ あの地図がおかしかっただけよ！」

「はいはい。最新版だったんだけどね」

それから本当に無人になったこの国がどうなったのかは、誰も知りませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8959h/>

太陽のない国

2010年12月12日02時29分発行